

抗アミロイド抗体薬治療を踏まえた認知症の人の介護家族等への支援の実態調査研究
研究分担者 高知県立大学社会福祉学部 教授 矢吹知之

研究要旨

抗アミロイド抗体薬治療では、治療開始直後から本人と家族への継続的な支援が必要となる。本研究は、治療後の生活変化に対応する心理社会的支援や情報提供の在り方を検討した。認知症カフェモデレーター研修参加者130名に調査を行い、基準に合致した125名を分析対象とした。先行研究を基に70項目を選定しデルファイ法で合意形成を行った結果、39項目が抽出された。今後は治療開始後の支援方法や多職種連携の在り方を明らかにする必要がある。

A. 研究目的

抗アミロイド抗体薬治療では、その対象者の治療開始直後からの本人のみならず家族の支援が求められている。治療にあたっては継続的な投与が求められているために、日常生活の生活リズムの変化が必要であり、また通院には移動支援も必要である。本研究は、こうした治療開始後の変化に対応するために、心理社会的支援、情報提供の方法に着目し、それらを適切に実施するための社会資源やサポートの在り方について検討する。

B. 研究方法

2026年3月14～15日の二日間にわたり「認知症カフェモデレーター研修」に参加した、30名の認知症カフェ運営者を対象に、終了後3回のオンラインにてデルファイ調査を行った。調査項目は、認知症カフェで展開されるプログラムおよびその効果等に関する項目である。認知症カフェモデレーター研修は、オランダのアルツハイマー協会が実施する運営者向け研修の日本バージョンを認証を得て実施されている研修で、現在400名の修了者がいる。そのため、調査対象者は運営する認知症カフェの目的や方法について一定の標準化がなされた対象者である。

デルファイ調査の1回目対象者選出において、「認知症予防」「高齢者サロン」に該当する認知症カフェ、および、認知症の人と家族が参加していない認知症カフェを除外した。調査対象は125名であった。

（倫理面への配慮）

本研究は、高知県立大学倫理審査委員会の承認（承認番号：250043）を得て実施した。研究目的、方法、参加による利益・不利益、参加の任意性および途中辞退の自由について文書と口頭で説明し、自由意思による同意を得た。データは匿名化し、収集したデータは厳重に保管した。

C. 研究結果

過去の認知症カフェに関する先行研究から、有用

と思われる下記の既存尺度等から70項目を選定した。ソーシャルネットワーク尺度（LSNS-6）6項目5件法、WHO-5精神的健康度5項目5件法、うつ2項目2件法、UCLA孤独感尺度短縮版6項目4件法、UCLA孤独感尺度 20項目4件法、生きがい意識尺度（ikigai-9）9項目5件法、認知症の人に対する態度尺度から5項目、援助成果測定尺度15項目、良好な人間関係の構築10項目、地域住民の高齢者支援パワー尺度9項目6件法、日本語版ソーシャル・サポート尺度12項目7件法を選定しデルファイ法にて80パーセントの合意率で合意形成とした。最終的に39項目が選定された。デルファイ法による合意形成は2回目では収束せず、来年度以降、3回目のデルファイ調査を実施する予定である。

D. 考察

認知症カフェは、認知症の本人、家族介護者だけではなく、地域住民、専門職も対象とした開かれた場であるために、ソーシャル・サポート関連スケールが、その効果指標として抽出される傾向がみられた。一方で、ミーティングセンターは、地域住民は対象ではなく、認知症の本人とその家族が対象となっており、より心理的なサポートが実施しやすい環境と考えられている。

E. 結論

抗アミロイド抗体薬治療開始とその後の心理的な支援およびソーシャルサポートの提供の効果的な方法を見出すための研究が求められる。こうした支援が行いやすい環境の在り方、サポート体制、効果的な多職種連携の方法について明らかにする必要がある。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

該当なし

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし